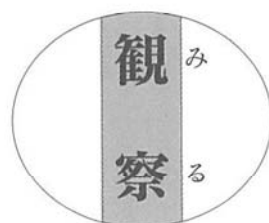


交流と農業者の視点



共生の時代

農業・農村はまさに共生の時代に入った。「互いの役割を認め合い、互いに恩恵を受けつつ共に生きていく」共生の時代。それは自然との共生であり、国民各層とであり、立場を同じくする世界の人達とである。

食料・農業・農村基本法の論議でも、WTO農業交渉でも共生を抜きには語れない。

国民各界各層との共生を確かなものにするため、多様な交流が進められていることだ。

特に、農業・農村が持つ食料生産をはじめとする多面的機能で国民の暮らしと深くかかわっているため、中央・地方を問わず農政確立のためには国民の理解がぜひとも必要だ。

世論形成に影響力があるオピニオンリーダーや報道関係者

北海道地域農業研究所

事務局長

谷口 勝

へのアプローチも大事だが、一人一人の農業関係者のフットワークも重要。交流があつて相互に理解しあい共生関係が生ずる。そのために、十分な説得力と農業つて魅力あるなあと思われること。

農業に自信と誇り

それぞれの農業者が地域の人達をはじめ国民各界各層に向かつて自信を持ち、毅然として食料や農業について語り、相手も自分の立場や暮らしを通じての考え方を述べ合う。

そうして交流が生まれ、共生が育まれ、理解が深まってくる。

農業者が自信を持つ、毅然とするバックボーンは農業に誇りを持っていることである。

誇りを持っていることは、自分の能力に対する自信につな

がり、説得力をもつ。

我が国での本道農業は専業農家として大規模経営を展開して所得を確保している。

その分資本を多用しており、リスクも大きく経営能力が問われる。まさに進取の精神に富んだプロフェッショナルである。

また、地域の特性を活かした稲作、輪作にもとづく畑作、草地型酪農など土地利用型の持続的農業に取り組んでいる。食料生産に関しては優等生である。

生活の視点

そして、その結果としてのくらしについての考え方である。今農村では、ゆとりのある生活が求められており、安全・安心なくらしが求められている。

農業・農村では従来からの生産重視の視点も必要であるが、生活面への視点が重みを増している。面的にはトイレの水洗化や医療施設の充実など生活インフラを整備しつつ、家庭では家事、育児、高齢者介護等々を家族全体として捉え協力関係を作り上げていく。

ゆとりを創出してところをリフレッシュし、充実した女性や若者が共感する農村生活を築く。また、農村での食と農の教育力を活かして「いのち」を育み「こころ」を鍛え「仲間」をつくる運動も盛んである。

魅力あるライフスタイル

モノや情報の高密度社会にあつて、こころの余裕や土に触れ額に汗して作物や家畜を育ててみたいと希望する人は多い。都市のなかには農村生活の一部を取り込んだライフスタイルを楽しんでいる家族も少なくない。著名な映像作家の映し出す農の情景は心を洗う。次の世紀は「こころ」の時代、「農」の時代と言われている。

さまざまな農業・農村の魅力をふんだんに盛り込んだライフスタイルメニューを用意して、一歩踏み込んだ都市の人々との交流が本物だ。農業経営は優等生、魅力あるライフスタイルで自己実現。国民の生活にとけこむ交流資源がある。

交流を深める

食料・農業・農村に関する国民的論議では、国内生産重視・自給率向上については浸透したと思っている。そのような、基本的な政策への反映部分と同様に重要なのが地域レベル、農家レベルの実態に理解を得る交流である。

食料の供給や多面的機能の維持を通じて国民各層へ安心、安全なくらしを届ける。それは、農業者の自信と誇りに裏打ちされたライフスタイルを媒体とした交流で共に生きていく関係がより深まると確信する。